たとえそうでなくても
―キース・エマーソンに捧ぐ

塚 本 潤 一

奨励者紹介〔つかもと・じゅんいち〕
日本キリスト教団芦屋浜教会牧師
同志社女子大学嘱託講師
日本基督教団讃美歌委員

主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知っています。すべてこれらのことは、あなたがたのためであり、多くの人々が豊かに恵みを受け、感謝の念に満ちて神に栄光を帰すようになるためです。

だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

（コリントの信徒への手紙二 4章14―18節）

キース・エマーソンとの出会い

皆さん、おはようございます。私はこの同志社大学を1986年に卒業して、今年でちょうど30年を迎えました。私は神学部で新約聖書を勉強していたのですが、橋本滋男先生という素晴らしい教授と出会って、たくさんのことを教えていただき、本当に楽しい同志社ライフを過ごしました。

同志社に来る前、私は高校を卒業して、大阪芸術大学で音楽学を学んでいました。音楽学の中でも、音楽工学専攻というところで、シンセサイザーやコンピューター・ミュージックの勉強をしていました。なぜ、音楽工学を勉強したかったのか。それは、高校時代に一人の天才ミュージシャンに出会ったからです。その天才ミュージシャンとは、名前をキース・エマーソンと言います。イギリス人で、私より14歳年上の1944年生まれでした。

このキース・エマーソンは、ハモンドオルガンやピアノ、そしてモーグ・シンセサイザーという新しい楽器等を使って、ロックに革命を起こした人です。ロックにクラシックやジャズをもち込んで、それまでバンドの添え物的な扱いであったキーボードを一気に主役の座に引き立てた、天才的キーボーディストでした。

初めてキース・エマーソンの演奏をレコードで聴いたのは、『恐怖の頭脳改革』というアルバムでした。エイリアンを生み出したクリエイター、ファビオ・ニコリによる、おどろおどろしいジャケット。そして『恐怖の頭脳改革』という、なんとも恐ろしいアルバム・タイトル。原題では、『Brain Salad Surgery』となっており、「脳の外科手術をしたら、サラダのようにビチビチに飛び散った」というようなニュアンスでしょうか。ところが、おそるおそるレコードを聴いてみたら、それはそれは清らかな音楽が流れてきます。名曲「聖地エ

ルサレム」です。そして、後半の30分には「悪の教典#9」という、キース・エマーソンの代表的な大曲が流れます。

華麗なテクニックと、息もつかせない展開。私はあっという間にキース・エマーソンの演奏に引き込まれていきました。それからは、キース・エマーソンの真似をしたいと思うようになり、高校生なのに当時16万5000円だった、国産初のシンセサイザーを長期ローンを組んで買いました。今から40年前の高校時代ですから、それは今で言うと50万円から100万円ぐらいの高価なものでした。

使い方のよく分からないシンセサイザーをいじっては、必死で「悪の教典」のフレーズを弾いていたものです。そしてバンドを始め、そしてもっと本格的に音楽をしたいと思って、大阪芸術大学の音楽工学専攻に入学したのでした。

それからも、キース・エマーソンは「エマーソン・レイク・アンド・パーマー（ELP）」という自分のバンドで大活躍をしますし、オーケストラを率いて「ピアノ協奏曲第一番」という超大作も世に送り出します。映画音楽でも活躍して、『インフェルノ』『幻魔大戦』など秀逸なアルバムを残しています。2011年3月11日の東日本大震災の時には、なんとか日本の人々を勇気づけたいと、「日出ずる国へ」という曲をすぐに作って、公開しました。いつの時代にも彼は輝いていて、華麗なテクニックとぐっと考え込ませる曲の構成で、キーボード少年をうならせ続けてきました。

キース・エマーソンを襲った悲劇

ところが、そのキース・エマーソンに悲劇が襲います。神経性の病気で、右手の四と五の指が使えなくなってしまったのです。それまでの過激なプレイがたったのでしょうか。何度も治療したり、手術を受けましたが、一向によくなりません。それどころか近年は、右手の四と五の指が全く機能しなくなり、三本指しか動かなくなってしまったのです。

しかし、それで演奏をやめるようなキース・エマーソンではありませんでした。彼は左手で右手をカバーしたり、アレンジをし直して、ものすごく高度な演奏をし続けていました。その姿は私たちに、「右手の四と五の指が動きませんが、それが何か」と言っているようで、とても恰好良かったのです。

そして、今年の4月14日、そのキース・エマーソンが来日してコンサートをするということで、すぐにコンサートのチケットを取りました。1万6000千円もする高額のチケットでしたが、キース・エマーソンを生で見られるならば安いと思い、躊躇せずにそのチケットを手に入れました。

受付開始と共に電話をかけまくって、41番目のチケットを手に入れることができました。音楽をしている友人たちは、みんな否定的でした。「往年のテクニックも、輝きも見ることのできないキース・エマーソンなんて見ても仕方がない」と言うのです。しかし、私は例の「右手の四と五の指が動きませんが、それが何か」というキース・エマーソンの生き様に非常に感銘を受けていましたし、ぜひその姿を目に焼き付けておきたかったのです。

しかし、いよいよ日本でのライブまであと1カ月という3月10日、「キース・エマーソンが亡くなった」という突然の訃報が飛び込んできました。その日には詳細な情報が入りませんでしたが、次の日から少しずつ事情が分かりはじめました。なんと、キース・エマーソンは、ロサンゼルスの自宅で、拳銃で自分を撃って、自死をしていたのです。

右手が自由に使えず、往年のような華麗なテクニックを披露できなくなったキース・エマーソンに対して、ツイッターをはじめとするSNSの書き込みには「ボロボロの演奏だ」とか「もう引退した方がいい」というような、きついコメントが載るようになっていました。キース・エマーソンは、それらの書き込みに大層ショックを覚えていたようです。そして日本公演についても、随分悩んでいたそうです。「日本のファンがあきれてみんな離れてしまうかもしれない、もう日本公演が終わったら引退する」とまで言っていたそうです。

そして、だんだんと日本公演が近づいてきた時、キース・エマーソンは不安と恐怖に襲われ、こんな惨めな姿を日本でさらすならば死んだ方がましだ、と思ったのかもしれません。彼は頭に銃を向けて、71歳の生涯を閉じたのです。天才キース・エマーソンのなんとも孤独な、そしてつらい最後でした。世界中の音楽関係者に衝撃が走りました。全世界のキース・エマーソンのファンが悲しみに暮れました。どうして、あのふてぶてしいまでの「右手の四と五の指が動きませんが、それが何か」と、生き続けてくれなかったんだろうと思いました。71歳のキーボーディストに、誰も20歳の頃の冴えとひらめきなどは要求しないのに。たとえ老いさらばえても、キース・エマーソンはキース・エマーソンじゃないか。三本指で堂々と弾きこなしているキース・エマーソンの勇姿を目に焼き付けたかった、と心の底から思いました。

もしもキース・エマーソンが聖書の言葉を知っていたら

長い間「エマーソン・レイク・アンド・パーマー（ELP）」で一緒に音楽活動をしてきたグレッグ・レイクが、インタビューに辛そうに答えていました。「キース・エマーソンが自分で死を選んだ、と聞いても僕は驚かなかったよ。だって、キース・エマーソンは長い間、うつ病で苦しんできたんだから。1977年の頃からうつ病にかかって、40年近く本当に苦しんできたんだ。うつ病がどんなものかを言い表すのは難しいよね。みんなも何となくなら知っている。気分がすごく暗くなるとかね。でも、実態はもっと複雑だ。人格そのものを変えてしまう。最終的にキースは深い悩みに捕らわれたひどく孤独な人生を生きていた。ひどく混乱し、絶望し深く落ち込んでいる様子がわかったよ。もし明日目が覚めなければいいと考えるくらい絶望を感じている人がいたら、誰かに話してください。医者、友達、誰でもいいから。彼らに話して、自分の状態をわかってもらおう。もしキースにもそうした道があったなら、今もここにいたかもしれない」（イギリスの音楽紙『NME（ニュー・ミュージカル・エクスプレス）』が運営する音楽サイト「NME.com」の日本版インタビューより 2016年3月17日）。

こうグレッグ・レイクは語りました。このような孤独とうつ症状に苦しんできたキース・エマーソンは、それでもステージに立つとベストなスーパーマンのような天才キーボディストを演じてきたのでしょう。40年間・・・しんどい毎日を送ってきたのだろうな、と今さらながら胸が痛みます。栄光の20代が終わって、30代に入ったばかりの頃から、ノリに乗っていると思われていた頃から、キース・エマーソンはたった一人で苦しんできたのです。

私は、もしもキース・エマーソンが聖書の言葉を知ってくれていたら、と思いました。もしも聖書の言葉を知っていたら、違う展開があったかもしれないと思いました。キース・エマーソンは、イギリス生まれでクリスチャンネームが「ノエル」ですから、決してキリスト教との接点がなかったわけではないと思うのです。しかし、自分のテクニックと音楽性だけを頼りに生きてきたキース・エマーソンにとって、聖書の言葉は耳に入らなかったのかもしれません。あるいは、聖書の言葉に「生きる」ということは、思いもよらなかったのか

もしれません。私はつくづく思います。もしもキース・エマーソンが聖書の言葉と出会っていたら、あるいは聖書の言葉を「生きてくれていれば」、違った結末を迎えたかもしれない、と返す返すも残念でなりません。

たとえそうでなくても

皆さんは今、同志社大学で学んでおられます。そして、皆さんには無限の可能性があります。「なりたい」と思うものに「なれる」可能性があります。他の人には、とうてい真似のできない、素晴らしい「ひらめき」があるかもしれません。他の人には、とうてい追いつけない、素晴らしい「実力」「冴え」「切れ」ももっておられることでしょう。皆さんにとって、それらの「ひらめき」「実力」「冴え」「切れ」がなくなってしまう、などという日がくるなんて思いもよらないでしょう。

私も大学生の頃、自分がそのように「誇っているもの」がだんだんと消えていくなんて、想像もしませんでした。今でも、自分が大学生だった頃から、それほど経ったようには思いません。卒業してから数年経っただけ、というような感覚をもっています。しかし現実には、私が同志社大学を卒業して、30年が経ってしまいました。大阪芸大を卒業して、35年。高校生時代から数えると、もう40年が経ってしまいました。残念ながら、30年、40年前にもっていた「輝き」は失われていきました。そして、今の皆さんには「関係がない」と思うような出来事が、いずれ訪れるでしょう。20年、30年経っていくと、自然とそのような出来事に直面させられるかもしれません。あるいは、もっと早く事故や病気で、今まで「できていた」ことができなくなる時がくるかもしれません。

そんな時に、ぜひ思い出していただきたい聖書の言葉があります。それが、今日お読みいただいた「コリントの信徒への手紙二」です。「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます」（4章16節）。わたしたちの「外なる人」は衰えていくのです。日々衰えていくかもしれませんし、突然衰えるかもしれません。でも、「わたしたちの『内なる人』は日々新たにされて」いくのです。

私の今の職業は、芦屋浜教会という教会で牧師をしたり、同志社女子大学で聖書を教えたり、賛美歌の仕事で賛美歌を作ったり、歌ったりしています。全部「声」を使った仕事なのです。ある日、突然「声」が出なくなったら。突然でなくても、日々私の声は、しわがれていっていますし、伸びも失われています。このまま、だんだんと「声」が出なくなる日も、そう遠くない日にくるかもしれません。

問題は、その時にどう生きるのか、ということです。生前のキース・エマーソンのように「右手の三本の指しか動きませんが、それが何か」、そう言えるような生き方をしたいと思うのです。「外なる人は衰えていきますが、それが何か」。涼しく、そう言えるような生き方をしたいのです。なぜなら、「外なる人は衰えても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていく」と聖書で約束されているからです。

もしも、皆さんが将来、「今までできたことができなくなってしまった時」、ぜひ今日の聖書の箇所を思い出してください。きっと、皆さんを受け入れ、支え、新しい生きる命を与えてくれることでしょう。たとえそうでなくても、きっと私たちの「内なる人」が日々新たにされて、輝く日を迎えることでしょう。皆さんが、そのような人生を送ってくださることを、切に切に祈っています。「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます」。

2016年4月27日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録